第２節　資料館における社会貢献活動

第7回公開授業「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－2」を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第７回目となる平成19年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。実施体制も昨年度と同様、埋蔵文化財資料館と山口大学教育学部との共催で、山口市大内御堀菅内にある山口大学教育学部実習農場で延べ４回に渡って行い、小学生2人、保護者・一教育学部学生、山口県立大学学生など20名、総勢22名の皆様に参加していただいた。以下で授業内容を報告する。

5月26日（土）－田植え－

田植えに先立ち、4月19日（木）に事前に申し込みのあった参加者4名と教育学部の学生とで育苗箱に種籾をまいた。種籾は無事に発芽し、5月26日に好天の中、教育学部の徳永技術専門職員に代かきをしていただいた約53㎡の水田に田植えを行った。

7月21日（土）－草取り・土器づくり－

稲の生長は予想以上に早く、6月12日には長さ約33㎝、7月21日には約80㎝に生長していた。しかし、日照時間と水田の栄養分の不足により、葉がやや黄色くなっていたため、少量の肥料を施肥した。また、昨年同様、水田にはほとんど雑草が生えなかったが、畦には雑草が生い茂っており、参加者全員で協力して除草を行った。

その後、実習室にて館員から弥生土器の説明を受けた後、土器づくりを行った。ほとんどの受講者にとって土器づくりは初めての体験であったが、弥生時代をイメージした力作が多数できあがった。なお、製作した土器は8月25・26日に館員と徳永技術専門職員・参加者有志により、「覆い焼き」にて焼成し、概ね無事に焼成することができた。

10月7日（土）－収穫－

今年は大きな台風もなく、秋晴れの晴天の中、作業を行った。最終的に稲は長さ約90～110㎝（昨年:120㎝）にまで成長した。収穫にはアワビの貝殻や模造した木庖丁、石庖丁などを使用して穂摘みを行い、残りは鎌で根刈りをしてはぜ架けをした。稲を任意で抽出し、参加者全員で収穫量を調べたところ、1株が分かれた数（茎数）は9～13本、穂1本についた籾は42～134粒、1株についた籾は約600～1200粒（昨年：1000～1800粒）であった。稲は昨年より一回り小さい印象で、収穫量も昨年よりも少ないことが判明した。

10月6日（土）－脱穀・籾すり、赤米を食べる－

前回同様、秋晴れの晴天の中、公開授業最終日を迎えることができた。この日はまず、足踏み脱穀機による脱穀や唐箕による選別を体験した後、箸こぎ、臼と杵による籾すり、てみとザルによる選別を体験した。この作業は大変手間がかかり、約2.7ｋｇの玄米を精米するのに参加者・関係者約15人で約3時間を要した。残りの籾は精米機で籾すりを行い、全収穫量を計量した結果、玄米で約8kgであり、昨年の10ｋｇよりもやや少ない収穫量となった。昼食には土器や羽釜で赤米入りご飯を炊いたほか、アサリの潮汁、ニジマスの塩焼きや豚汁風の芋煮をつくった。赤米は現在のお米よりもやや硬いものの、ほのかに甘い味であった。その他の食事も美味しく好評であった。

写真57 種まき（4月19日）

写真58 館長挨拶（5月26日）

写真59 縄ない（5月26日）

写真60 苗の観察（5月26日）

写真61 田植え（5月26日）

写真62 雑草とり（7月21日）

写真63 土器づくり（7月21日）

写真64 稲の観察（9月22日）

写真65 収穫具の説明（9月22日）

写真66 木庖丁による収穫（9月22日）

写真67 参加者の皆さん（9月22日）

写真68 臼と杵による脱穀・籾すり（10月6日）

写真69 土器による炊飯(10月6日)

写真70 食事風景（10月6日）

公開授業を終えて

今回の公開授業について、参加者からは「お米ともみ殻を分けるのが大変でしたが、がんばって赤米になったときはうれしかった」（小学生）、「体験を通して学ぶことの大切さを教わった」（学生）、「食べ物に対する見方がかわりました」(学生)、「お米を食べるまで多くの手間と時間がかかることがわかった」(一般) などの声が寄せられ、授業の目的を達成することができたと感じている。また、小学生、一般の方、本学教職員、学生など、様々な世代の方が体験や食事の際に協力して作業を行い、交流を深めていたのも印象的であった。一方、今回は昨年よりも稲の生長が悪く、収穫量が減少するなど、稲作の難しさを改めて体感した。以上、参加者をはじめ、教育学部の関係者など多くの方々に支えられて、盛況のうちに公開授業を終了することができた。館員一同心より御礼申し上げたい。

『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』を開催

主　催：特定非営利活動法人　子どもとともに山口県の文化を育てる会

「心をかたちに」～子どもたちの粘土の未来～実行委員会

共　催：山口大学埋蔵文化財資料館

参加校：山口県立防府養護学校・周南養護学校・豊浦養護学校・山口養護学校・山口大学教育学部附属特別支援学校

会　場：社会福祉法人暁会　養護老人ホームやはず苑敷地（山口県防府市江泊179）

平成19年度、当館の新たな取り組みとして地域ＮＰＯ法人との連携事業を開催した。実施した『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』は、参加校の児童が自由に造形した粘土作品を、弥生時代の土器焼成方法として推定されている「覆い焼き」で焼き上げるという内容である。ワークショップは本学教育学部生約40名の授業の一環としても取り入れられ、平成20年１月26日～27日にかけて開催された。以下に内容を紹介する。

1月26日（土）

午前11時に現地集合し、参加者へ趣旨説明（写真71）を行った。次いで舞いきり方による古代の火起こしを体験した（写真72）。約40名で10回以上の点火に成功し、種火を窯点火用の炭に移した。

午後からは築窯に取り組んだ。今回は降雨による窯内への浸水を防ぐため、基礎に耐火煉瓦を敷き、その上に藁と薪を積み上げ、作品を並べ置いた（写真73）。児童の作品は小さいものが多く、かつ繊細な細工が施されているものが多かったために慎重に行った。その後、全体を藁で覆い、最後に水で練った赤土を窯全体に塗りつけた（写真74）。厳しい寒さの中、手を悴ませながらの作業であったが、参加者全員根気よく行い、５基の窯が完成した頃には既に夕暮れ時を迎えていた。

午後４時過ぎに窯に点火し（写真75）、学生参加者は解散した。焼成には一昼夜必要であるため、その後は資料館員と実行委員会スタッフが交替で窯番を行った（写真76）。覆い焼きでは窯内温度が緩やかに上昇していくが、今回温度計測を行った窯では午前３時30分に820℃の最高温度を記録した。

1月27日（日）

点火から19時間後の午前11時には窯内温度が約100℃にまで下降した（写真77）。計画では昼頃には作品を取り出す予定であったが、未だ高温を保っていたため午後３時に繰り下げることになった。

午後３時、資料館員と実行委員会スタッフ、参加校教員で窯の解体と作品の取り出しを行った。多少の破損はあったものの、全体的には良く焼成されており、見事に赤橙色（弥生土器の色）に焼き上がっているものも数多く見られた（写真78）。

ワークショップを終えて

当館の覆い焼きによる弥生土器焼成実験は、平成16年度に実施した公開授業に端を発している。その後、学術研究とともに市民への体験学習の提供を目的に焼成実験を継続してきたが、今回は養護学校児童の粘土作品を弥生時代の技法で焼成するという試みであり、現代芸術と古代の技術がどのように融合するのかが注目された。完成した作品はいずれも覆い焼きならではの暖かみのある色に焼き上がっており、焼きむらや黒斑も作品の一つの個性となっているように感じられた。

当館初のＮＰＯ法人との共催イベントであり、様々な面で関係者の方々に助けられての実施となった。会場を提供いただいた養護老人ホームやはず苑の皆さん、実行委員会スタッフ、学生諸君、そして参加校の児童・教員に感謝の意を表したい。

完成した作品は、翌年度に山口県庁１階ロビーにて展示される予定である。美術作品展ではあるが、当館の特色を生かした資料展示で参加する予定である。

写真 71　ワークショップ参加者（山口大学学生）の皆さん

写真 72　窯を点火させるための火を起こす

写真 73　薪の上に子どもたちの作品を並べる

写真 74　藁を被せ、全体を粘土で覆うと窯が完成

写真 75　5基の窯を順次点火させる

写真 76　窯は約 24 時間燃焼を続ける

写真 77　燃焼終了

写真 78　見事に焼き上がった作品

写真 79　光市小周防相ヶ迫出土品